

「対話と実行」座談会 グループ・団体との座談会 第6回「YASU海援隊」(H22.09.27)の概要

1. 開会

司会： ただ今から、物部川ブロックの地域アクションプラン関係事業者の皆様方と、知事との「対話と実行」座談会を開催させていただきます。

この座談会は、知事が各地域にお伺いして、皆様方と直接対話をさせていただくことで、地域の実情や課題を把握し、これからの県政に生かしていこうと、一昨年度（平成20年度）から実施しているものです。本年度は産業振興計画も2年目を迎えたことから、各地域で具体的に地域アクションプランを実践、果敢に挑戦されている方々との意見交換を行う座談会といたしました。

それでは皆様との意見交換に先立ちまして、知事からごあいさつと、産業振興計画の取り組みについてお話させていただきます。

2. 知事あいさつ

YASU海援隊の皆様方におかれましては、本日大変お忙しい中、この「対話と実行」座談会にご参画を賜りまして、心より御礼を申し上げます。

本日はYASU海援隊の皆様方が、特に観光の関係、さらには漁業資源をうまく生かしたお取り組みを、盛んにしておられるということで、いろいろ勉強させていただきたいと思います。どうぞよろしく願いいたします。

先ほどはシーカヤックも体験させていただきまして、本当にありがとうございました。私は水の上で船に乗ってというのが大好きなものですから、仕事とはいえ、心の底から本当に楽しかったです。

そして、ヤ・シィもてなし隊の皆様方、先ほどは、ほんとうに美味しいお食事をありがとうございました。(料理のメニューの中の) カッティールロールも、実はダイエット中なので1つままでと思っておりましたが、非常においしかったので2つも食べてしまいました。

【産業振興計画について】

それでは最初に、県としての現在の産業振興計画の全体の取り組みと、特に観光について、そして来年何をしようとしているかについて、少しポイントも絞らせていただきながら、お話をさせていただきます。

こちらの、[産業振興計画のパンフレット](#)をご覧くださいと思います。この産業振興計画全

体として何をしようとしているか。特に今年はどこに力を入れようとしているかということが、この3ページにある「改定の柱」に出てまいります。

第1に、地産外商戦略を加速化させようと考えております。人口が減っている高知県では、県内市場だけではジリ貧になります。外に打って出て、外から外貨を稼いでくる。もしくは観光客の皆さんに高知県に来てもらって、高知県でお金を使っただく。いずれも地産外商ということになります。これをもう1段戦略として加速をしていけないだろうかということです。

よく報道もしていただいておりますが、首都圏で設けていますアンテナショップなどは、そのための取り組みの1つということになります。ただ、アンテナショップの目的は、その店で物販やレストランをやることで儲けることよりは、むしろ、そこで高知県のいろいろなものを多くの方々に見てもらおう中で、バイヤーとか、レストランのシェフという方々に向けて外商活動をしていくための拠点である、というイメージが非常に強い施設だと思っております。また、そこでテストマーケティングした情報を、産地にフィードバックをしていくことで、産地の力を強化していく。そういう役目も持った施設として設けているわけです。

外商活動ということで、現在盛んに、展示商談会、県産品フェアなどの様々な機会を作り出そうと、アンテナショップを運営しております地産外商公社が努力を重ねているところです。一昨年度は、こういう地産外商のための県産品フェアや商談会は、13件ぐらいしかできなかった。しかし、昨年度は全部で72件実施することができました。72件の展示商談会、県産品フェア等のうち、現在までに178件の契約が成立した事例も出てきています。今年度も既に、67件実施するということが確定しているところです。今年度もその勢いを加速させていかなければなりません。

ただ1つだけ注意をしなければいけないと思っているのは、外商公社もできて展示商談会とか県産品フェアの機会は増えてはきてますが、これが増えてきている大きな理由の一つが、やはり龍馬ブームだと思います。「龍馬の高知県」だから、「龍馬の土佐」だから、機会を設けていただいているという要素が非常に大きいと思っています。そのブームが衰えた後の、来年以降にどうしていくかということが大きな課題です。

これは、今のうちにいかに本物の人間関係、商売の関係を作りあげていけるかということが、非常に重要なことです。「今年は龍馬ブームだから、高知県と商談や県産品フェアをやらせてもらいましょう」ということになるでしょう。それを引き続き、来年は「去年いい仕事をしてくれたから、今年もやってもらいたい」と言ってもらえるようになることが、非常に大きいのではないのかなと思っています。非常に今、緊張感を持って、そういう取り組みを進めていかねばならないと思っています。

改定の柱の第2は、「ものづくりの地産地消」。地産外商と言っても、ものはできるだけ高知県

内、地産であることが非常に重要であります。今、高知県はほとんど外産地消になっている場合が多いような感じもしますが、地産であって外商していくということが重要だと思います。残念ながら、高知県はものづくりが県内だけで完結しないという状況が、ずっと続いてきています。できる限り、県内同士でもものづくりが完結をするように、お互い情報を流しあったり、いわゆるバーチャルな商談会をするという取り組みを進めています。

第3のポスト龍馬博の推進は後ほどお話をさせていただきます。

改定の4番目、地域の取り組みのステップアップ推進。まだ初期段階の取り組みから、ソフト事業のご支援、バックアップをさせていただく。いずれ地域アクションプランになるのを目指していただくとか、そういう取り組みを今回は追加したところです。

改定の柱の5番目は人材の育成・確保。様々な人材育成関係の施策を講ずることとしております。

【ポスト「龍馬博」の推進】

ポスト龍馬博の推進については、現在、「土佐・龍馬であい博」が、幸いにして大変好評をいただいています。「土佐・龍馬であい博」のメイン会場の「高知・龍馬ろまん社中」は動員目標が40万人、また安芸・梶原・土佐清水のサテライト会場を含めた全体では65万人というのが動員目標でした。「功名が辻」のときに高知城の下につくったパビリオンは、260日間で入っていただいたお客さんの数が26万903人です。今年は360日になるということと、あと、龍馬さんですから少しは上回れるだろうということもあって、年間の駅前の「ろまん社中」の動員目標を40万人と定めたところでした。ところが8月15日には既に40万人を超えました。65万人という4つのパビリオン全体での目標につきましても、9月10日の時点で65万人を突破し、まもなく70万人に達するだろうという状況です。

なぜ、このように多くのお客さんに来ていただけたかという、いろいろな要素があります。龍馬が非常に人気だったというのもあります。また、今回の場合は、旅行商品にさせていただくということに力を入れた営業活動を、去年からずっとしてまいりました。実際のところ、新しく「土佐・龍馬であい博」関係、もしくは高知、もしくは龍馬関係で、観光商品が100件ぐらいできました。「高知・龍馬ろまん社中」、例えば昨日（9月26日）どうだったかという、観光バスが72台来ました。一番多いときには100台超えるぐらいのペースで観光客の皆さんが来られています。

要するに申し上げたいのは、来年もこういうかたちで、旅行商品に取り上げていただくようなかたちにすることが、非常に重要だと思っています。単にPRするだけじゃなくて、旅行商品になるような観光のイベントなどで売り込みをかけようと、考えているわけです。

ポスト龍馬博推進委員会というものを設けて、そちらでいろんな専門家の方々に来年に向けてポスト龍馬博を、どうすべきかを検討してまいりました。その中で、県外の旅行エージェントの方々にご参画いただいて、旅行会社の方の視点から見てどうかという点でも、検討を賜ってきたところでした。

その中で、2つ大きな方向性が出てまいりました。まず、来年に向けて、「龍馬」というのを中心に据え、一定の観光イベントを打ったほうがいいんじゃないかというのが、第1の大きな方向性です。これはどうしてかということ、多くの大河ドラマの主人公と違い、坂本龍馬の場合は、元々多くの方が知っていて、それが今回の「龍馬伝」によって、ますます有名になったというふうに考えるべきだと。「龍馬伝」を見て高知に来たいと思っている人が、まだ10分の1ぐらいしか高知には来ていません。いきなりこれを全部捨てて、例えば来年は長宗我部元親で売りますというふうなかたちにしてしまうのは、絶対にもったいないからやめたほうがいい。それから、旅行商品にするためには、〇〇博と名のついた、冠のついたやり方をしたほうが絶対がいい。坂本龍馬の故郷であるということは高知県の強みです。ですので、龍馬ふるさと博というのをやってはどうかということです。

その中で、今年のように駅前に中心があり、そして各地域にサテライト会場があるというやり方を引き続きやってもらえると、旅行商品にしやすい。核になる商品として何を持ってくるか、専門家の方にいろんなご意見を聞いて、いくつかの選択肢の中で、やはり今まで実現できていない龍馬の生家を置くのがいいだろう。大河ドラマのセットで使った生家であれば、旅行会社も旅行商品にし易いというご意見をいただきました。そういうことで、駅前にそれを核として据えながらサテライト会場を設けようとしているところです。

このサテライト会場を今度設けていくにあたっては、今の安芸、そして梶原、そして土佐清水、それぞれに引き続きサテライト会場は設けていきます。引き続き「龍馬」をメインに据えていきますが、今年の「土佐・龍馬であい博」よりも、広がりを持たせたものにしなければならないと思っています。龍馬の愛した食、花、自然の体験など、そういうかたちで龍馬というのを一つの引き出しにしていきながら、高知県の強みである自然体験、食、そして花、こういうものをしっかりと商品化していきたいと考えているところです。それぞれについて関連する中核施設、中核イベントというのを、季節ごとに打っていきたいとも思っています。

これだけ多くの人の心を捉えている坂本龍馬を、いきなりポンと捨てて、新しい観光資源、新しい観光イベントをとったりするようなことは絶対にすべきではない。ただ他方で、その「龍馬」を中心に据えながらも、今年よりは裾野を広く対応していくことが重要だと思うのが、まず第一です。

そして、第二に各地域で1泊以上できる観光地づくりを進めていくということがあります。恐

らく、こちらが本当の意味で、高知県観光の底上げを目指していくものになっていくんだと思っています。高知県は、十分1泊、2泊してもらえだけのものを持った観光地です。東部、中央部、西部。少なくともそれぞれで1泊できるような観光地づくりというものをぜひ目指していきたい。

例えば今回、岩崎弥太郎の生家がある安芸は、一挙に観光地になりました。例年、数千人の観光客しか来なかったのが、今年はもう20万人ぐらい来ているんじゃないでしょうか。ただ、岩崎弥太郎邸から出て、そこから中岡慎太郎の生家、中岡慎太郎館、モネの庭、そして今度、世界ジオパークの国内候補地に申請をしております室戸ジオパーク、中岡慎太郎の銅像、魚梁瀬森林鉄道とずっとまわっていけば、もう、優に東部地域だけで1泊できる観光資源を持っているはずです。

YASU海援隊の皆様方も、2泊の観光モデルコースというのをお作りになられて、売り込みもかけておられるというふうに向っています。

私たちも、できる限り各地の観光資源が、観光客を受け入れられるかたちでの条件整備をしつつ、「こうまわっていただければ1泊できます」、「この地域では2泊できます」というモデルコースを組んで、旅行エージェントに売り込みをかけていきたいと、今考えているところです。

高知の「ろまん社中」のある駅前を中心として、次に桂浜に行くでしょう。そしてまた市内へ帰って来て、次は例えば安芸のサテライト会場へ。そこから、先ほど申し上げたモデルコースに沿って1泊していただくような観光体験をしてもらう。2つは大いに関係しているわけです。ただ、皆様方には釈迦に説法になってしまって大変恐縮ですが、残念ながら、高知県の観光資源の中には素晴らしいものを持っていながら、なかなか旅行商品になりにくいというものがいくつかあると伺っています。

私が知事になった直後、「花・人・土佐であい博」が始まりました。直前のところで営業に行ったときに、東京の旅行エージェントに「知事さん、花をテーマにしても旅行商品にはなりませんよ」と言われたことが、いまだに忘れられません。「旅行商品として売ったその時期に、ちょうど花が咲いているかどうか分からないでしょう。あまりにもリスクが高すぎて旅行商品にできないんです。だから応援することは出来ません」という趣旨のことを言われました。地味とか、訴えるものがないとか、そういう理由もあったと思いますが、そう言われたのを覚えています。

要するに、定時、定量、定価格、定品質の「四定」の条件が揃っていて、少なくともこういうことができますという最低レベル以上のものが確保されていることが重要なのではないのでしょうか。例えば、花であれば、牧野植物園は、今回それがだいぶ確保されたのではないかと考えてます。なぜかという、温室がありますので、気候条件にかかわらず一定以上のことは必ずできますし、後は花の種類が増えたので、ある花が咲いてなくても別の花が必ず咲いています。観光地

として、そういうかたちで強くなりました。故に旅行商品に組み込んでもらいやすくなりました。

そういう観光地の磨き上げを、各地区で徹底してやっていく。旅行エージェントがここは組み入りたいなと思うところを1個でも増やし、高知県での滞在時間を延ばしてもらうようにしていきたいと思っています。

何でもかんでもいきなり100点満点というわけにはいきません。今9月議会に、ポスト龍馬博、今申し上げたようなアイデアでの一連の計画を作って、議会に関連予算を提出をさせていたところなんです。お認めをいただきましたら、すぐ旅行エージェントに観光振興部長と一緒に営業活動をしていこうと考えているところです。ですから、是非この後の意見交換会でいろいろなかたちでご教示賜われればと思いますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

3. 団体の活動報告

香南市長のあいさつ、県出席者の紹介のあと、YASU海援隊の参加者の自己紹介がありました。

【YASU海援隊発足と活動について】

Aさん： YASU海援隊の生れたきっかけは、平成17年に奈良県の進学塾の塾長から、この広い太平洋と革新的な歴史を持つ土佐で子どもたちを学ばせたいという話があったことからだと聞いています。

最初は夜須と本山、この2泊3日のコースで始まりました。子どもたちは、夜須のほうに昼に入り、即シーカヤックをし、それから後には貝磨きや漁協でのシイラ漁の話を書きました。夕食は漁協女性部がもてなしました。次の日は地曳網をし、昼食を食べて本山に送る。ちょっと短いコースでした。次の年も大体同じようなかたちで進みました。その頃から、県の地域支援員の方と旧夜須町の企画課の方から、ベースが大体できてきたので、行政主導ではなくて自力で企画・立案をしてやってみてはどうかとお願いしたので、会を重ねて自分たちでスケジュールを組んだりするようになり、だんだん海援隊の姿が見えてきました。

それで、塾のほうにお願いをして、本山との2泊3日ではなく、香南市単独で2泊3日をやりたいという希望を出したところ、OKをいただけたので、スケジュール等を頑張って作りました。

その流れで、YASU海援隊として、平成21年4月に設立総会をして、発足させました。

今年の塾の体験メニューをお示ししますと、1日目は去年までは龍河洞に行っていましたが、今年は野市動物公園へ行きました。

全国的にも珍しい、双子のチンパンジーとその母親のお話と園内見学というのを、今年新

たに塾のコースに組み入れるようになりました。

その後、ヤ・シィパークで歓迎会を行いました、竹とんぼ作りを行いました。この竹とんぼを作ってくださった方は競技会で日本一をとった方で、飛ばすと30mぐらい上にのぼって、子どもたちが本当に喜んでいました。

夕食は、もてなし隊の協力を得まして、シイラのフライを入れたカレーライスとメロンを出して大変好評でした。

2日目がシーカヤックです。天気も良くて、大手の浜まで行って、シュノーケルもして帰ってきました。昼食は今日皆さんに食べていただきました「カッティーロール」で、これも大変人気で、特に男の子はおかわりを随分していたみたいです。スイカもおいしいのがありまして、いっぱい食べておりました。

それから漁協のほうに行きまして、漁船のクルージングと長太郎貝磨きを班に分けてやりました。漁船のクルージングは3年ぐらい前から始めまして、大変好評です。漁師の方に漁の仕方とか話していただいています。

夕食は、漁協の女性部の方が作ってくれたシイラのお刺身、それと磨いた長太郎貝をボイルしたり、シイラのジャンジャン焼きなどを出していただき、特に刺身はもうすごい人気でした。

それから、芸西の天文館のほうへ行きまして、天体観測を行いました。

3日目朝食後、赤岡それから野市のほうへ行くので、地元の方とはここでお別れ会をしました。

Bさん：　そして、(赤岡で)本山のほうのグループと合流しまして、約80名ぐらいで地曳網をやったんですが、この日はアジが取れまして、それをさばいて、昼食にしました。

絵金蔵では、まち歩きということで、何気ない場所なんですけど、赤岡のまちを歩いてもらい、4ヶ所ほどチェックポイントがあり、そこは必ず通ってもらう約束で、子どもたちに2人1組とか3人1組になって歩いていってもらいました。ちょっと暑い中だったけど、なかなかこれも楽しんでもらうことができました。

Aさん：　大体海のメニューが主体になっていますが、夜須町の奥に国光という所があつて炭焼き体験ができる所もありますので、これからもどんどん新しいメニューを探して、いいものがあれば取り組んでいって充実したものにしていきたいと思います。

Cさん：　続いて(シーカヤックの体験を担当している)NPO法人「YASU海の駅クラブ」の紹介をさせていただきます。

海の駅クラブは、平成14年の高知国体の際、ヨットの大会を今の旧手結海水浴場のところで行ったことから始まりました。まず艇庫を作って、スロープも作ったのですが、国体後にも生かせる施設にしたいということで、なるべく会場は仮設で済ませ、現在のような施設を作りました。

そこでせっかく作ったものを今度どうしていくかということで、有効に使うためにNPO法人「YASU海の駅クラブ」を作り、法人化したのが平成16年です。現在の会員数は個人、家族を入れて90名、団体が8団体、賛助団体が2法人ということです。

海の駅クラブの目指すところは、まずは、やはり、子どもたちが、楽しくマリンスポーツに親しめるということで、今、B&G財団に「YASU海洋クラブ」として登録しております。そして、「出前ヨット」というかたちで小学校などへも行っております。

次には、ハンディキャップのある方に対する活動です。先日、アクセスディンギーという、風が大きくきてもこけないというヨット、障害者でも誰でも乗れるというヨットを使用して、アクセスディンギーの高知大会第1回目を開催しました。キャッチフレーズは「HAND IN HAND」です。「HAND IN HAND」というのは障害のある方もそうでない方も、皆が手を握り合っているという意味と、そして、この地域が手結（てい）ということで、その名前も掛けての意味があります。参加艇が25名ほどでした。ただ、ボランティアスタッフとして、うちの会員以外に、高知大のヨット部の生徒もボランティアとして参加していただいて28名で対応し、いかに大変かということをご理解いただきたいと思います。

また、お年寄りにもカヌーなどを楽しんでもらい、「いつでも誰でもがマリンスポーツに参加、楽しむ」ことをテーマに、この海の駅クラブは運営されています。さらに、「機会と環境を、安全に提供する」、それが一番大事だと心がけています。

<「広める」活動>

まず先ほども説明した、子どもたちのために学校のプールでヨットとカヤック。まず子どもに海に親んでもらうため、小学校などへ出向き、プールでカヤックとかヨットの体験してもらおうということを行っております。そういうふうに子どもたちにまず触れてもらい、海でやればもっと楽しいと思ってもらえればと思っています。

我々の夢は、ここから国体選手を出したいというものです。そのためには、やはり小学生のうちからヨットに対する興味を持ってもらうということが必要だと思います。ですから、香南市の小中学校でマリンスポーツ体験ということで、カヌーを教えたりとか、ヨットに乗っていただいたりということを行っております。夜須中学校にはヨット部もできまして、全国大会で今年も2位という成績を収めております。

また、ただのマリンスポーツだけではなく、イカダの体験というのも今年新しく取り入れました。タイヤチューブをいくつも組んでイカダを作り、海へ出て行くということを体験してもらいました。

<「高める」活動>

「広める」の次は、やはり先ほど言った国体選手を出すような「高める」というかたちで、「香南市市長杯・龍馬カップ in KOCHI」や、「ヤ・シカヤックマラソン大会」を開催しています。

その他、海辺の学校「マリンスポーツ学科」や「大人のヨット教室」、シーカヤックの指導者や救急救命の指導者、また船舶免許が取れるようなそういう講習会なども行っております。

<「支え合う」活動>

あと、県の障害者スポーツセンターとか香南市の社会福祉協議会さんと協力をして、障害者の方にも、マリンスポーツを楽しんでもらう取り組みもしています。年々マリンスポーツへの障害者の参加者は増えております。ヨットへ2人乗ると、障害者の場合は、親はそこで子どもから目が離せず自分は楽しめないということがあったのですが、ここでは保護者も同じヨットへ乗って楽しめ、いつも障害者の世話をしなければいけないという思いから解放される。ここへ来ると自分も楽しむことができるとおっしゃってくれています。

それと、不登校児童のマリンスポーツ体験ということで、高知県の心の教育センター、香南市にあります不登校児童の支援センターと一緒に、不登校や悩みのある子どもたちに、まず太陽の下へ1回出てみようと呼びかけています。少しずつ参加者も増えてきています。海での体験で少しずつ心が外へ出て行けるようになればいいかなと、我々は心のケアなどではできないわけではないのですが、こういうこともやってみるべきではないかということでやっております。

また、周辺の宿泊施設と、今年協定を結びまして、観光客がホテルの紹介でうちへ来て、マリンスポーツ体験をしていただくということやっています。

もう海水浴だけではなく、そういう体験型をお客さんが望んでいるところであると思います。我々は少しずつでも、こういうかたちで観光事業へも協力していきたいと思っております。

ただのイベントで終わらないように続けるために、やはり広域的な交流の拡大とか、人、物、情報、地域が一緒になって、皆が和になった情熱で挑戦したいと思っております。

Dさん：（塾生の食事の提供をしている）ヤ・シィもてなし隊がどうしてできたとかそういうことをお話します。塾生さんのお食事をということが最初で、旧夜須町の、商工の方からそういう依頼がありました。子どもの昼食と夕食の用意をさせていただき、最初は子どもと一緒にカレーライスを作っていました。

最初はやはり海ですから、シーフードをと考えましたが、冷凍食品に頼らざるを得なくて、やめたほうがいいかなと思いました。そして、去年ぐらいでしたか、地元の野菜の入ったカレーに、シイラのフライを添えて出しました。去年は子どもと一緒に作りました。

あと、くろしお鉄道の沿線ウォークのお弁当、それから2DAYウォークなど、そういうイベント時のお弁当やバイキングの料理を作らせていただいています。調理室を持っていないので、お弁当も高くなり、時にはお断りすることもあります。一昨年ぐらいの赤岡の町を歩いて、月見山でお花見をするというイベントの時にも、お弁当を作らせてもらって、そのときは確か、お茶がついて1000円のお弁当だったんですが、「高いけれどそれだけの値打ちがある」とおっしゃってくださいました。

これからは、もてなし隊のオリジナルの料理を考えたいと思っています。なるべく地のものを使い、その季節ごとのお料理をこれからも考えてやっていきたいと思っています。

ただ、業者ではないので、次々言われても、メンバーには他に仕事を持っている者もいたり、対応もできないので、どうしても年に4、5回の活動が限度かなとは思っています。これからも頑張ってやりたいと思いますので、またよろしく願います。

Eさん：（貝磨き体験を担当している）住吉海鮮倶楽部ができたのは、長太郎貝の養殖を始めたときに、長太郎貝を売るためには、ただ個人でやるだけでは駄目だということで、漁師が集まって住吉海鮮倶楽部を設立しました。

そして平成7年から、12月29日に山海交流市場を本山町の人たちの協力で始めました。そして、それ以外にも、安芸や本山の産業祭へ、長太郎貝を持って行って販売したりしています。今年も5月の連休に、住吉の港の駐車場で山海祭というのを開催し、夜須町へ揚がるアオリイカ、そして長太郎貝、本山町の牛肉、それをセットにして焼いて食べてもらったり、ハマチの一本釣りやサンゴウォッチングなどをしました。

Fさん：（クラフト体験を担当する）月見山こどもの森のFです。「歴史とロマンに包まれた月見山を歩こう」というように、月見山は非常に歴史に関するものがあります。そしてまた見るものもたくさんあります。

月見山は、高知から安芸までの間の一番最初の山です。そして、長宗我部元親と安芸国虎の合戦のあった所でもあります。

月見山は全体で21ヘクタールで、山城まで行くのに大体45分かかります。その中に遊べる場所がたくさんあり、いわゆるアスレチックで、グリーンアドベンチャーがメインです。山のアスレチックというのは県内ではここにしかありませんので、非常に人気のあるコースです。

子どもたちと一緒に作ったツリーハウスが2つありますが、これは、昨年、赤岡小学校の5年6年生を担当する先生から、「みんなゲーム機ばかりで遊んで、外へ出て行くことがほとんどない、何か子どもたちを外へ連れ出す方策はないか」と話があり、月見山の職員と赤岡の子どもたちと一緒に、月に1回ずつツリーハウスを作ろうということで、人工林のヒノキを伐採、間伐して皮を剥いで、それから乾燥させて一緒に作りました。子どもたちは大変喜んで、今でも遊びに来てくれます。

広場には、大きな天然林の木があります。天然林の木の枝からロープを1本ぶら下げて、横木を1つだけ付けた360度動くブランコは、小学生から幼稚園の子どもまで、非常に人気があります。

月見山こどもの森の利用者は、大体年間3万人。子どもたちが大体8500人。月見山で森の話とか森のクラフトを作ったりする参加者が、大体5500人ぐらいおります。

そして今、高知市のほうでは、放課後児童クラブというものを作り、それで地域の人たちが面倒を見ているようですが、勉強だけするというのは退屈なのか、我々にお呼びが掛かり、今年の8月は高知市から1250人ほど来園されました。

月見山では、クラフトでいろんなものを作っていますが、ほとんど手づくりで、山の木の枝を使ったり、最近、竹が非常に邪魔になっておりますが、その竹を使って「レインスティック」という楽器を作ったりしています。これは南アメリカのインカ帝国神殿で使った一番最初の楽器です。他にも竹笛などを作ることもあります。

このように山にあるものを拾い集めて、いろいろなものを作ることで、子どもたちに山のことを知ってもらう、勉強してもらっています。

目・口・鼻・耳の絵、こういう看板を月見山の山中には立てています。大人の方たちのほとんどはあれはなんだと聞きに来ますが、子どもは聞きに来ません。これは感性なんです。耳の看板のあるところでは、音を聞いてもらうんです。一体どんな音が聞えるか。風の音、人の話し声、自動車、いろんな音が聞える。子どもによって聞く音が違います。だから3人集まって話をすればいろんな音が聞えるということがよく分かる。これは目も鼻もそうですね。見えるもの、におうものも違います。

なぜ、こういうことを考えたかといいますと、高知市の小学校の先生のところで、子どもたちが甫喜ヶ峰の公園について検討会をしたことがあります。子どもたちは公園で看板をたくさん目にしたけれど、どの看板を見ても「何々してはいけません」と書いてあるけれど、「いけません」と文字で書いていなくても、手のマークを描いて、その上を×をしておけば、ここで何をしてはいけないのかわかりやすいのではないかと。看板の表記は、そういう簡単なものがあるという提案があって、それ以来、これを利用していただいています。

最近、ヤ・シパークさんとか、きらら桜祭などいろんなところへ楽しく参加させていただいています。これからも、よろしくお願ひしたいと思ひます。

4. 意見交換

知事： いろんな活動をやっておられるということが、非常によく分かりまして、大変ためになりました。

まず一番最初にYASU海援隊の、塾生の体験メニューは、本当に本格的ですね。これだけのことをやられているのであれば、おそらくここだけじゃなくて、あちこちでやりたいという人は出てくるんじゃないかなと期待感がすごくあります。これを例えば月に1回、とか、月に2回だとかいうかたちで、より本格的に旅行商品として定時定量で受け入れていくかたちでやっていくための課題や必要なものがあれば、是非教えていただきたい。

Aさん： そうですね、(旅行者に観光案内や宿泊・食事の手配などをしたり、地域にある体験メニューなどの観光資源を商品として企画し旅行業者などに売り込んでいく、体験型観光の仕掛けを行う)ランドオペレーターがないことですね。いいものを持っていても、商品にならないところが今ちょっとネックになっていると思うんです。幡多のほうには、そういう専門の方がいらっしゃるそうなので。

知事： 幡多は、幡多の市町村全部で広域観光圏協議会というのを設立したんです。協議会を設立した上で、きちっとした事務局を作ったんです。スタッフは事務局長と、滞在型、体験型観光をやってこられた方1人、それと元々おられた方、それから県のスタッフも一緒になってやっております。実は、今度中芸のほうも、広域で一緒にやっぺいこうじゃないかと呼び掛けていて、そこで1人、ランドオペレーターとして対外的に売り込みをしたり、外からの質問に答えるスタッフを用意しています。

いろんなやり方があると思ひていまして、この広域観光圏協議会を作ったほうがいいパタ

ーンもあります。しかし、そうでなくてもここは観光資源の宝庫ですので、さっきのを見ていると2泊ぐらいは軽くいろんな体験を組み合わせでプランが出来るのではないかと思います。

Aさん： できたら行政のほうで、物部川流域ですね、南国、香美、香南でそういう組合を作っていたら。今、広域観光を進めていますけれど、やはり3市だけではいかん、高知市も入れないかんということで進めています。

知事： なるほど。3市プラス高知市で広域観光圏協議会みたいなかたちにしていったらどうかというお話なんですね。だんだんONE BY ONE（ひとつずつ）で連携を強めていくというのもあるでしょうし、一挙に、まずその地域で海援隊をやっておられることをドンと打ち出していきようなかたちで、担当が1人か2人いれば全然違ってきますものね。

中芸にしても幡多にしても、観光に通じている方、観光協会に人脈がある方に来ていただいて、次につなげていきようなかたちになっていますので、そういうかたちで紹介させていただくとか、いろいろな方法を市長とも相談しながら考えたいと思います。

【海の駅クラブの活動について】

そして、海の駅クラブのお話を聞きながら思ったのですが、目指しておられるところが深いですね。障害者や子どもたちを視野に入れた取り組みは素晴らしいと思います。

参加される人数、受け入れの数を増やすことは可能でしょうか。

Hさん： 可能だと思います。ただ私たちが目指しているのは、一般の観光というよりも体験型観光です。教育的な体験型観光が、我々の得意分野だと考えています。

知事： なるほど。

土佐清水市の窪津漁港でも、東京の私立小学校のお子さんたちの受け入れをされて、一緒に地曳網をやったりしていますね。

しかし、こちら（香南市）には、すごい地の利があると思います。空港から近く、ほかの体験をしたいと思ったときに、いろんな施設が近隣にたくさんありますから。幡多のほうでは、体験型観光はあるけれど、その次の施設が遠い。車での移動が大変です。だから、その点はこちらのほうが地の利があって、PRの仕方によっては、いろんな人が来るようになるのではないのでしょうか。だけど、来てくれる人が誰でもいいというわけではないん

ですね。教育的な、体験型観光とか滞在型が望ましいので、それを求める人に来てほしい。
そういうことですね。

Hさん：　そうです。一般的なマリンスポーツの体験をしようとするれば、多分、高知県ではなく
沖縄へ行くと思います。バナナボートがあり、いろいろなレジャー施設があつて楽しいので、
それが普通だろうと思います。なので、沖縄、レジャー観光地とはまた違う特色を持つため
に、教育型というかたちで特化したほうがいいんじゃないかとは考えています。

知事：　確かに、本当に海で遊んで楽しむだけなら、沖縄に行って、バナナボートやシーカヤック
で遊び、夜はリゾートホテルに泊ればいいじゃないかというふうになりますね。だけど、
高知県はそうではなく、地元の方と触れ合い、獲れたての魚はこんなにおいしいのかと感動
するといった体験が大事なのでしょう。それなら、どこにも高知県は負けないと思います。
滞在型、体験型観光に、教育を組み合わせしていく。障害者や子どもでなくても、大人でも、
例えば単なる社員旅行ではない、一段上の社員旅行を目指す場合もあるかもしれません。マ
リンスポーツと一口に行っても、他とは違うマリンスポーツ。本当の意味の福利厚生という
ことでしょうか。

【ヤ・シィもてなし隊の活動について】

そして、ヤ・シィもてなし隊の皆さん方も、まさにその取り組みを担ってこられてきたわ
けですが、子どもは皆さんの料理にとっても喜ぶでしょう。

東京の子どもには、刺身とはもともとあの切り身の状態の刺身があり、それをパックに詰
めて売っていると思っていたり、あれが海で泳いでいる魚と一致しない子というのが大勢い
ます。ですので、教育の面というのは重要だと思います。

ただ先ほど、いつも受け入れているわけではないので、そういう体制にしようとするの大変
だとおっしゃられました。それから、材料の調達とかそこはどのような感じで、ご苦労があり
ますか。

Dさん：　もうちょっと人を入れて、忙しい時には交替できたり、休みが取れるようなシフトを
組むことができるようになれば良いと思います。

材料は、その日になって食材がなく困るというのは、絶対できません。しかし、大量にど
こから仕入れてくることも、2ヶ月も3ヶ月も受け入れがなくなると、処分しなくては
ならなくなり、割高になるので、そこが問題だと思います。

【教育型体験観光について】

知事： 塾の子どもたちを受け入れた際の、一連の行程は夜須から赤岡、赤岡から龍馬歴史館と、バトンリレーみたいに受け継いでいかれるようなかたちになっておられますが、その間ずっとツアーコンダクターさんか誰かが付いているんですか？

Aさん： 県のコンベンション協会の方が1人付いていますが、私や他のメンバーが今回は同行しました。

知事： 地元の方が初めから終わりまで全部付いて回ることで、それは重労働、大変なことですからね。時間的にも制約が出来て、落ち着いて他のことができないでしょう。だから、必ず、そういうオペレーターが必要になるわけですね。

しかし、コンベンション協会が付いていることで、(協会が対応できる)量的限界が出てきてしまうみたいなことになってはいけない。理想は、例えば旅行会社などが、地域それぞれのコンセプトに沿うようにツアーを作ってくれて、それで自分たちのツアーコンダクターも付いて行くようになることだと思います。

単なるマリンスポーツという、マリンスポーツ体験みたいなかたちにくくられてしまうと、他のところに負けてしまうんで、こういう教育型体験観光というカテゴリーがあることを、深く認識してもらえそうな売り込み方が、非常に重要だと考えさせられました。

【月見山こどもの森の活動について】

ツリーハウスをはじめ、子どもが山でアドベンチャー体験ができるのは、今、県内では月見山だけなんですか。高知県は森(林)の国なのに、それは非常に意外でした。

そして、非常に興味深かったんですが、放課後子ども教室で出前教室を行っておられるとおっしゃっていたでしょう。今、放課後に子どもをしっかりと見てくれる方と、それから子どもたちと一緒に勉強が終わったら遊べる居場所作りということを進めたいと思っています。子ども教室か放課後児童クラブ、これをさらに学びの場へバージョンアップさせて全県内の小学校で作ろうとして進めているところです。

特に小学生とかは、勉強だけではなく、総合的な人格かたち成が必要ですから、そういう取り組みをは非常に大事だと思います。出前教室でやっていることなど、どのようなことをされているのか教えていただけるといいでしょうか。

Fさん： 森の話や生物の話、全体的な自然の話をして、その後にクラフトを教えます。子どもたちが一番面白がるのは、松ぼっくりの実を使っておもちゃを作って、それをゴムで飛ばす遊びです。50メートルぐらい上ってヒラヒラ飛んでいくのですが、子どもたちはとても喜びます。その遊びの中で、松の実はこんなかたちをしていて、発芽をしてまた木になる。その木から酸素をもらって我々は生きている。なおかつ、我々が出す二酸化炭素まで、木は吸ってくれるんだと。木がなかったら人間や動物は生きていけないんだと、教えます。

自然を使って、子どもたちに学んでもらう事が大切だと思います。

知事： 光合成のことなど、そういう風に教えられるといいでしょうね。あとで子どもたちが学校で光合成を学んだときに、学ぶ意欲がわき、なぜこういうことを勉強するのかと、学ぶ意味がわかってくるのではないのでしょうか。

【絵金蔵の活動について】

知事： この間、私は東京でデザイナーの山本寛齋さんとお話をさせていただきました。彼は、盛んに、高知では絵金が突きぬけて力を持っていると言っていました。絵金をアメリカに持って行ったら、アメリカ人は皆、絵金に心を奪われるだろうというのが、山本寛齋さんの持論です。

前から聞いてみたかったのですが、絵金のアピール力、PR力についてどう思われますか？

Bさん： いろんな方から、山本寛齋さんと同じような意見をいただいています。フランスに持っていても、絶対受けるであろうとか。

それ以外に、絵金についての自分たちの活動について報告させようとして、絵金が描いたもの、弟子が描いたものを含め300以上、県下に散らばっている屏風絵を、絵金蔵としては少しでもきちっとしたかたちで調査して、データ収集をする必要があると思っています。

赤岡には、絵金の屏風絵を通りに出すという古い町の文化なんかも残っているので、これは他の町にはないものなので、アピールができるものかなと思っています。

高知県の絵金が、日本の絵金というものになっていけば、自分たちはすごくいいと思っています。

知事： そうですね。私も非常に感心させていただいているのが、赤岡の町の商店街、特に「冬の夏祭り」の活動にしても何でも、地域がよく商店街というものでまとまって、いろんなイベントを企画、実施されている。そういうことが商店街としてできていく秘訣というか、そ

ういうものって何かありますか。(他の地域の)多くの方が、もうちょっとどうしようもない、希望が持てないとかそういうことを言われている中で。

Bさん：平成5年に土佐絵金歌舞伎伝承会という、絵金の屏風を元にした歌舞伎をやろうというグループが発足し、それから大体約10年ほど、住民含め、役場、町長、それから商工会とか議員さんとかいろんなかたちのグループの中で、町について徹底的に話し合った時期がありました。その中で、やっぱり絵金という部分を大事にしていかなければいけないと、それを核とした町を作っていこうということになり、絵金蔵や弁天座ができたという経緯があります。今後は、それを、自分たちがどう使っていくか。赤岡にも空き店舗が増え、商売をしている人がだんだん高齢化してきているので、もう1つ2つ工夫が必要という気がします。

【手結漁協・ヤシパークの活動について】

知事：漁協がシイラの水産物の加工、水産業の振興、特に観光や教育に生かそうと取り組まれていることは、素晴らしいと思います。

シイラは（午後）3時に揚がって夜食食べるっていうんですね。まさに、ものすごく足が速い（鮮度が落ちやすい）からこそ、いわゆる地元へ来てしか食べられない素晴らしい宝なんでしょうね。

高知にはカツオだけではなく、シイラもある。県外の方にも、そういう広がりを知ってもらいたいと思います。坂本龍馬、カツオだけではなく、高知の底の深さ。この「龍馬伝」をチャンスにして、地元の人しか知らないものをうまくPRして、観光客の心をとらえられるようにしていきたいと思います。

ヤ・シパークは、海水浴シーズンでない時でも、しっかりとその地を拠点にPRしているのがすごいですね。1つの海を生かすという点においては、高知県のいろんなところで有りなのかなと思います。今後の課題などはありますか？

Gさん：ヤ・シパークは、県外の方には人気があるのですが、県内の方が意外にご存知ありません。海があるのは当たり前だという感覚で、素晴らしさをわかっていただけていない。もっと県内の人に来ていただきたいと思っています。

【リーダーの育成、ボランティア活動への参加】

Cさん：高知県全体で、知事が頑張ってくれています。リーダーが変わると、これだけ県の雰囲気が変わるのかと、実感しているのですが、なのに、高知県がリーダーを育成するシステ

ムがありません。中内県政時に、リーダーを育成しなければいけないと、20から25歳の青年を中心に、「青年の船」というものを作りました。そこで頑張った人間が、今、県下全域の様々な分野でリーダーとして活躍しています。しかし、それ以降、高知県はリーダーを育てるということをしていない。ここは、我々が育成するにも限界があるので、やはり行政にリーダーを育てて欲しいと思っています。高校生とも座談会をやっているなら、彼らにまちづくりをさせてみるとかすると、その中からリーダーが生まれてくる。リーダーが1人いるだけでも、いろんなことができます。ですから、高知県はそれに対してのお金をもっとつぎ込まなければならないのではないかと思います。

もう一つ、高知の中で自分らでもいつも思っていたのが、表彰制度です。若くても県に貢献した人間を積極的に表彰するような、そういう制度を作って、あんな若い人でも頑張ればこうなれると。高知県が、そういう目標とされる人間を育てるような県であればいいと思います。

そして、我々が最も悩んでいるのがボランティアのことです。行政の人間は土日休みがほとんどですが、公務員がボランティアに来ることは滅多にありません。もっと意識付けされるよう、給料の採点にもなるようなシステムであってもいいのではないのでしょうか。土日の行事ってものすごく多いんです。そのとき、人手が足りず、リタイアした人の助けだけでは、イベントに限られたものになります。ですので、ボランティアのことは、行政の中で真剣に考えていただきたい。

また、知事は高知の魚はおいしい。それをもっと前に出して、人も呼んでくるとおっしゃっています。ですが、漁協は、盆やゴールデンウィークなどの大型連休のときに休むところが多いです。観光客が、高知に最も訪れてくるそのときに、なぜ休むのか。せっかく来てくれたお客さんに一番おいしいもの食べさせたくても、漁協が休みでは、新鮮な刺身はどこにもないわけです。

連休とか休みが多いときに働く。観光客を高知へ呼ぶのであれば、全体を見つめる人間が県の中にもっといて、考えないといけないと思います。

こんなことが漁協だけではなく他の所でもあるならば、1つずつチェックして、本当の意味でお客をもてなす高知県にしたいというなら、そういう部分から改正していく必要があると思います。

知事：なるほど。1つ、今後の課題とさせてもらいたいと思います。

観光でオンのときに、観光施設や店が休みになるっていうことが結構多いです。観光客を受け入れる地として、まち全体、市町村全体で、他の人が休みのときだからこそ仕事をする意識

が必要になってくるでしょうね。

リーダー育成のシステムのお話について、表彰制度のことを考えてみようと思います。地域のリーダーとなる人材を育てていくというお話は、確かにものすごく重要だと思います。今回、産振計画の改定の柱として、この人材育成事業っていうのを大幅に強化しようと考えています。

例えば、「目指せ！ 弥太郎商人塾」というのは、集合研修みたいなのを受けていただいた後に「ステップ2」というのがあって、全国的に著名なコンサルタントの人と一緒に、オンザジョブトレーニング（実際の仕事を通して行う職業教育）と講習を受けることになっています。講習のときに宿題を与えられて、それをオンザジョブでやってみて、それをまた、今度講習でやっていく、そういうことを繰り返して、最後は自分で商品開発をして、売れる事業主を育てよう、そういう取り組みなんですね。

「農業創造人材の育成」。これは農村振興のリーダー育成をしたいという事業です。

こういう、人材育成をやっていかなければ、例えば補助金がある間はうまくいくけれども、それがなくなった瞬間に取り組みが立ち消えになってしまうことになりかねません。こういう人材育成の取り組みは、ますます強化したいと思います。高知工科大、高知大ともタイアップして、深く学ぶことができるようなかたちでやったり、さらには地域に出て行って、そこで人間力も含めて教えるような講座を設けるなど、したいと思っています。

ボランティアの話、尾崎県政になって、職員の残業が2倍、3倍になってちょっと忙しくなっているんですが、おっしゃるとおりだと思います。

【県内小中学生の受け入れについて】

Cさん： 体験とか磨き上げっていう部分でちょっと提案なんですけど、例えば、まだちょっと自信がないけれども、多少なりとも受け入れはできそうだという地域はあると思うんです。それが旅行商品としてすぐには受け入れられなくても、何回かやっていくうちに磨き上げられる部分があると思います。

小学生とか中学生、高校生の高知県内、香南市であれば海側に住んでいる学生たちが、山のほうへ行っていろいろな体験をする。また逆に、向こうのほうから海の体験をしに来るとか、県内の小中高生の体験の受け入れから始めていけば、県外から観光客を受け入るというハードルが多少、低くなるのではないのでしょうか。また、それとともにステップアップ、磨き上げができるのではないかと考えています。小学生にしても、交流によって、高知県にはこんなものがあるんだという気づきもあると思います。

知事： なるほど。最低限のところはクリアして、例えば安全性とかをクリアしているのを確認

した上でということになるんでしょうけど、またそういうことも考えさせていただきたいと思いますし、逆に言うと、小学生だけじゃなくて、県内の、例えば学生や社員旅行などもいいですよ。

【海のイメージ戦略と観光戦略における役割分担】

Hさん： 知事にお願ひがあります。高知県がこれから観光で生きていこうというのであれば、是非イメージ戦略で海を売っていただきたい。というのは、例えば、高知といえば四万十というイメージがまずあります。四万十と言え、四万十でとれるうまい天然うなぎなど、そういうストーリーが自然と都会の人たちの頭の中にはインプットされていると思います。

今、龍馬博をおやりです。高知・龍馬、これも1つのイメージ戦略だと思います。しかし、海に対するイメージ戦略がないのではないのでしょうか。せっかく太平洋に面している地域なので、「南国高知」という、海に対するイメージを何らかのかたちで発信をし、全国的に植えつけていただきたいと思います。

また、西部は四万十川がありますが、東部は今1つアピールが弱い。ジオパークも森林鉄道も僕は面白いとは思いますが。だけど、山・海・太陽の光があってこそ高知県であり、その関連からイメージを作っていただくといいのではないかと考えています。

知事： 分かりました。多分、さっき（高知の強みとして）食・自然・花と言いましたけど、その自然は体験なんです。体験・滞在型ということなんです、単なる自然とかいう漠とした言い方じゃいけないのでしょうか。もっと言えば、高知県に行くんじゃなくて、高知の夜須に行くんですから、そういうところから言っても、もう一段突っ込んだ取り組みをすることが必要だと思います。

Hさん： それと、観光の戦略の中で、高知県の観光振興部、コンベンション協会、市町村の観光協会というシステムがあつたり、地域創造協議会など、さまざまなシステムがあるんですが、それぞれの役割分担ができてないんじゃないかなと思います。もうちょっと合理的に役割分担をすれば、もっと力が発揮できるのではないのでしょうか。

知事： それはおっしゃるとおりだと思います。ただ、誰もやらない。誰も手つけないという状態よりは、皆がそれぞれ入ってくるという状態のほうが良いと思います。物事が進めば、だんだん役割分担ができてくるのではないのでしょうか。

地域によっては、県のコンベンション協会が全国に向けて売り込みをしてくれます。それ

には市長が、その地域のホテルの方、さらに実践者の方々も一緒に付いて来られる。その方々を支援員がサポートするなど、役割分担できているところはあると思います。

きちっと役割分担ができるのが理想だとは思いますが、ただ、まだ観光で滞在型・体験型で売っていくと、やりはじめた初期の段階ですから、そういう状況が生じるのだと思います。それを意識して、一生懸命考えるのが我々だと思います。

ある意味、リゾート型観光地は大資本が自分たちで開発してくれてやりきるので、うらやましいところはあるのですが、それでは本県は沖縄やハワイにかないません。

幸い本県には、歴史、評価の高い食文化など、ほかの県にはない強みがあります。ですが、やはり地域の皆さんとも一緒に、全体として観光を盛り上げていくということがどうしても必要となってきます。今は随分、盛り上がりが出てきたように思います。もっと続けていけるよう、努力していきましょう。

5. 閉会のあいさつ

知事： 今日には誠にありがとうございました。

シーカヤックに乗せていただき、またおいしいお料理をいただきました。そして、いろいろお話を伺えて、本当によかったと思います。

一言で言えば、体験型・滞在型の観光をこれから進めていく上で、高知県として、他の分野、他県とどう差別化していくか、大変参考になる話を聞かせていただきました。今後とも、2歩進んで1歩下がってということの繰り返しだと思いますが、諦めず、継続は力なりで努力を重ねていきたいと思っています。

是非今後とも、ご意見、ご指導、ご鞭撻を賜りたいと思います。

本日は長時間ありがとうございました。